

現代日本におけるペット葬儀 -人とペットの関係性の変化から-

犬を飼っている人であれば、ペットの葬儀を行うことは当たり前だと考えていた。しかし、自身よりも年上の世代にはペット葬儀の話が通じなかったことから、世代によって、ペット葬儀に対する考え方が違うのではないかと推察した。なぜ考え方が違うのか、それは、人間とペットの関係性の変化によるものと仮説を立て、その検証を試みた。

現代のペット葬儀とペット葬儀の歴史を比較することに加えて、宗教的観点、法律的観点を多用的に調べた。

結果として、時代によってペットと人間の関係性は大きく変わっていたことがわかった。過去の事例として、縄文時代の狩猟文化から弥生時代の農耕文化に変わること、ペット、特に犬の存在がパートナーから食料に変わり、供養という行為がなくなった。言い換えれば、両者の関係性はペットの供養に影響を与えることを示すものであった。現代では、家族に先立たれた老人や独身者のかけがえのない関係、自分が自分らしくあるための関係を求めて、ペットを飼うケースが増えた。そのため、現代ではペットは今本当の家族のようになり、それに伴いペット葬儀も発達した。しかし、ペット霊園が造られる前の時代、ペットの役割は番犬であり、仏教の考え方から立場が低かったことに加えて、墓地埋葬法13条による規定から、人間と同じように供養することが難しかった事実がある。

ペットと人間の関係が家族に近づけば近づくほど、ペットの供養が変化・発達しやすいと考えられる。筆者の論を客観的に示す量的調査を使った検討が課題として残っている